

# タイの仏教寺院壁画における 景観とコスモロジー表現

山野 正彦\*

Masahiko YAMANO

The Representation of Landscape and  
Cosmology in Mural Paintings of Thai Buddhist Temples

キーワード：トライプーム，宇宙観，景観表象

Key word : Traiphum, Cosmology, Landscape representation

## 1. はじめに

景観や空間の非言語的な表象媒体としては、地図、絵図、絵画、工芸品、建築、庭園、儀礼、巡礼、音楽、舞踊、その他があり、最近の文化景観論研究においては、これらをテキストとして景観を解釈する試みが行われている。複数の媒体のテキストを比較することによって、また作成主体の異なったテキストを比較検討することによって、より幅広く深い景観解読が可能となり、景観をめぐる文化政治学的なコンテキストの解明が期待できるとされる (J.S.Duncan 1990)。

COEプログラム「環境モノグラフ調査」における筆者の課題は、タイの上座部仏教寺院 (Wat) 内に描かれた壁画を素材に、18世紀タイ王国近代の国民国家建設初期に復活・再生されたトライプーム (Traiphum, 三界経) という上座部仏教的宇宙観の表象 (T.Winichakul, 1994) の中にみられる景観表現ないしは宇宙観の特質を解明することにある。

タイの仏教寺院の僧堂 (ubosot) や本堂 (viharn) の内部の壁には色彩豊かな壁画の描かれていることが多い。筆者は本プロジェクト開始以来、バンコクとその周辺のアユタヤ (Ayutthaya)、アントン (Ang Thong)、ノンタブリ (Nonthaburi)、ペチャブリ (Phetchaburi)、ラチャブリ (Ratchaburi)、その他の都市にある多数の上座部仏教寺院を訪問し、それら寺院の壁画を観察し、そのなかに描かれた景観・宇宙観の表象について、さらには庶民の日常生活

---

\* 大阪市立大学大学院文学研究科教授・COE事業推進担当者

風景などの考察を続けている。これらの壁画は大多数が18世紀後半以降、アユタヤ王朝後期からバンコク王朝の時代に描かれたものである。壁画の内容や描画の様式は時代とともに変化し、西洋文明が流入して近代化の進んだラーマ4世の時期のものになると西洋の遠近画法が導入されたりしている。しかし時代を通して壁画の画面構成には一定の類型が認められる。通常は仏陀の生涯の物語、ジャータカ(Jataka)の物語が展開されていて、それに庶民の生活風景などが加えられていることが多い。これらは通例、堂内の本尊の仏陀像が安置されている位置から見て、左右の壁に描かれている。しかし絵画の重要な部分として普通は本尊の仏陀の背後の壁に描かれている、上座部仏教の宇宙観トライプームの描写、および仏陀の対面の壁に描かれているMara(魔王)の軍団の襲来とそれを阻止しようとするDharani(地母神)の描写の存在を指摘しなければならない。

## 2. トライプームと壁画の構図

トライプームとはインドに始まり、スリランカやビルマ、タイなどでパーリ語によって記されていた上座部仏教の伝統的な教理書である。タイでは『トライプーム・プラルアン』がスコータイ朝の第5世リタイ王(在位1354~1376)によって1345年あるいは1359年に、約30種の経典類を資料に、編纂されたとされる。現在伝えられているテキストは18世紀末のトンブリ王朝のタクシン王、バンコク王朝のラーマI世によって再構成されたものである。これらの王はこの書の中に見られる仏教的宇宙観に従って国王=須弥山というイメージを使用し、国民国家形成期におけるタイ国民の支配と統合のイデオロギーとして使用することを狙った。

この『トライプーム・プラルアン』の写本には、絵画・絵図版のものがあり、トンブリ王朝時代の写本(1776)が、バンコクの国立公文書館に所蔵されている。またもう1つ別の版がドイツのベルリンインド美術博物館に所蔵されている。筆者はこのうちの前者のカラー写本をテキストとして使用することができた。またF.E. & M.B. Reynoldsによるテキスト本文の英訳が利用できる。トライプームの宇宙論によれば、世界は高低差のある垂直的に配列された3つの世界31の段階(プーム)に分かれていて、人間を含む衆生はその死後、それぞれの積んだ徳にしたがってこれらのどこかに再生する。絵入りテキストにはこの宇宙観に従った諸段階世界の風景のほか、この教理の根幹にある「メール山(須弥山)」を中心とする宇宙図が描かれている。また末尾のほうでインド、スリランカから日本に至る地域の地図(絵図)が存在することは、地図学史上よく知られた事実である。

バンコクとその周辺地域の寺院壁画は古いものでもアユタヤ朝後期以降のものであって、ほとんどはトンブリ次いでバンコクに都が遷都された後の製作になるものであり、上記のトライプーム絵図版に載っている構図の壁画が見られるのである。

ところでウボソットの内部は通常長方形になっていて古いものには窓がない。そして前後左右の壁面に絵が描かれている。主たる入り口の対面側に仏陀の像が安置されその前面で礼拝するようにになっている。上述のように仏陀の像の背後の壁に須弥山の図が描かれ、反対側の壁面

には多くの場合、釈迦の修行中にこれをたぶらかそうとする悪魔の王 (Mara) のおびただしい軍勢と釈迦を守るため髪を振り絞って洪水を起こそうとする地母神 (Phra Dharani) の図が描かれている。Dharaniの下部には地下の世界に住むRahu (アシュラの王) がナーガを吐き出している姿が描かれている場合も多い。なお一部の寺院では須弥山と悪霊の軍勢の図がそれぞれ前後反対側に位置しているが、これはより古いレイアウトと考えられている。

須弥山の図は『トライプーム・プラルアン』に描かれていたように、垂直の細長い柱の上にインドラなど神々の世界 (Tavatimusa Heaven) が載って、中心の柱から左右に柱が林立している構図であり、中間部にはガルダや月、太陽が見える。その柱の根元付近にはヒマファン (Himaphan) (ヒマラヤ) の森とこの楽園の森に住むキンナラ、象などの動物、それに森にあるアノタッタ (Anotatta) 湖が描かれる。さらにその下部には世界を取り巻く海と海に住む巨大な怪魚や人魚などが存在する。アノタッタ湖からは東西南北4方位に4つの川がそれぞれ牛、馬、獅子、象の口から流れ出す。また下部の別の部分には地獄絵が展開する。

ウボソットは僧が修行する場所であるが一般の人も礼拝することができる。長方形の隔離されたマイクロコスモスにコスモスの秩序が写し取られている。僧や民衆に宇宙の構造と仏教倫理を教える媒体となっている。寺院にはチェディ (Chedhi) すなわちストゥーパが必ずあるがこれも須弥山を象徴している。タイでは国王そして王宮は須弥山になぞらえられている。戴冠や葬礼の儀式は須弥山を象徴する御輿、御座船、玉座、プラ・メーン等が使用される。

ラーマ四世以降の西洋文化の流入と近代化の進む時期には、壁画の構図も大きく変わる。トライプーム宇宙観や地獄の図は姿を消す場合が多く、替わって西洋人や西洋建築、鉄道など西洋の文物が描かれるようになる。景観描写も遠近画法を用いた折衷的な手法が採用される。仏教僧で画家であったクラ・イン・コーンの描いた壁画はその好例であり、芸術的価値も高い。バンコク王朝初期の仏教寺院壁画に見られるトライプーム・コスモロジーの表象は仏教の説話・伝説の景観を用いて、王国のアイデンティティと統一、王権の浸透を図る役割を果たしていたと考えられるが、時代の進展とともに近代化の中で仏教を位置づけなければならないと言う課題が重要となってきたことが、壁画の構図の変化から見てとれる。

これら仏教寺院壁画の保存状態は一部の寺院を除いて良好とはいえない。建物の保守、補修が悪いこと、鳩などの鳥の害が著しいことなどにより、退色・剥離が進んでいる場合が多い。活用の仕方によっては優れた観光資源としての価値を有するだけに、保存のための施策を早急に進める必要がある。

### 3. 壁画の実例

以下、筆者の訪問したバンコクとその周辺の15の寺院壁画の写真の一部を示して、壁画の構図を見る。写真はほぼ推定制作年代に従って古いと思われるものから配列されている。